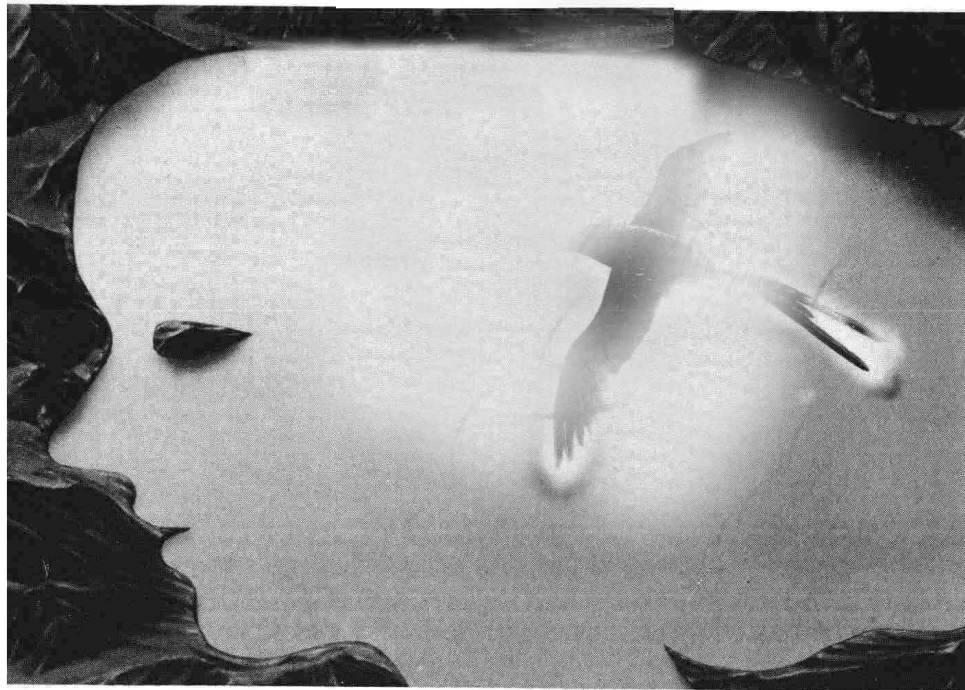


女神伝説



半村 良

女神伝説

一九七九年九月二五日第一刷発行
一九七九年一〇月三一日第二刷発行

定価 八八〇円

著者 半村 良

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五一〇
電話 出版部（〇三）二三〇一六三六
販売部（〇三）二三八一二七八一

印刷所 凸版印刷株式会社



© R. Hamura, Printed in Japan, 1979
0093-772220-3041

検印廃止。落丁・乱丁本はお取り替えます。

女 兄 告 加 社 美 方
神 妹 白 速 長 女 向

*
目次
*

74 63 52 40 28 17 7

役 劇 街 家 嫉 祖 計 抱 浴 相 視
者 場 路 族 妬 父 画 擁 室 場 線

199 188 177 164 152 141 131 118 107 96 85

断 母 处 魔 復 抵 偶 恩 恋 邸 暗
崖 親 女 界 讐 抗 像 寵 人 宅 雲

321 310 299 289 278 267 256 245 233 222 210

幻 現 電 時 味 終

想 実 話 間 方 章

装
幀

藤
居
正
彦

386 376 365 354 343 332

女神伝説

方 向

1

カーテンごしの幽かな光は、窓の位置を示すのが精一杯で、狭い部屋の中にごたごたと置き並べた品々の形を浮き出させる力はなかった。

小田急線代々木上原駅にほど近いこの木造アパートの一室では、電車が通るたび微かにその震動が伝わって来るのだが、今は最終の電車も通過して、この四、五〇分間というもの、安物のシングルベッドに身を横たえた志島純次は、ほとんど完全と言っていい程の静寂の中にいた。

近くを車も通らないし、アパートの中でドアを開閉させる音も聞えない。トイレの水音も久しく絶えているし、窓を鳴らす風も吹いてはいなかった。

珍しい夜だ。

仰臥して目をとじたまま、純次はふしぎに思った。静寂は四、五〇分ほど続いている。しかしまだ一時間にはなっていない筈であった。

僅か一時間足らずの静寂を珍しく思わねばならないということは、自分がいかに騒々しい世界に生まれてしまったかということである。

実を言えば、純次はさっきから起き出して何かしたくなっていたのだ。横になって灯りは消したものの、感覚は鋭くなるいっぽうで、とても眠れそうにはなかった。しかし、珍しく長く続いたその静寂が、彼に身動きをさせないでいた。

それは、通夜の席で咳の音さえはばかりる心理に似ていた。人々が協力して作りあげた均衡を破る者が自分であってはならないという、常識とも保身ともつかない遠慮である。

が、その均衡が遠くから破れた。

そのアパートのある狭い道路に、車の走行音が響きはじめてたのである。

クラウンだな……純次はその音に聴覚を集中しながら思った。

タクシーに違いない。

純次の勘は外れてはいない筈であった。そして彼は、人通りの絶えた暗い道を走るタクシーを思い泛^{うか}べた。今ごろなら、フロントガラスの内側にグリーンのランプが光っていることだろう。赤い空車灯をつけている車なら、こんな奥まった場所へは入って来るわけがないのだ。

キィ……と車がとまった。アパートのすぐ前である。

「どうもありがとう」

女の声が聞える。車から降りた女が言っているのだ。とすれば、車の中にはまだ客がいる。

「いいわよ、あさってね」

女の声だけが聞えて、相手の声はまったく聞えない。

その相手は男に違いなかった。純次は女の声をきっかけに大きく寝返りを打った。うつぶせになり、枕に顔を当てる。

「じゃあね」

随分親しそうな言い方だ。ボタンとドアが……ま……て、ギアの音が軋んだあと、車はまた走り出した。

女の靴音はアパートを通り過ぎ、少し駅寄りで急に消えた。そのあとを追うように、傍若無人な単車の音が激しい勢いで近付いて来て、あつと言う間に遠のいて行つた。

アパートのどの部屋かのトイレが、ザーッと水を流す音をたてた。純次は右手を伸ばし、枕もとのスタンドの鎖をさぐって引いた。スモールランプがつき、淡い橙色の薄汚れた枕カバーを照らし出した。

純次は体を起し、両足を畳の上へおろしてベッドに腰かけた。

2

純次はスタンドのシェードに指をかけて少し上向きにさせると、その下に置いてあつたハイライトの袋と使いすてのライターを取った。ハイライトはあと四、五本しかなかった。その一本を抜き出して咥え、火をつける。深く吸い込んで、ゆっくりと煙を吐き出しながら無意識に眉を寄せていた。

家の外の道で聞える女の声。

「ありがとう……じゃあね……」

夜中に何度そういう声を聞いたことだろうか。

中学二年生の頃だつたらうか。ある晩その声を聞いた純次は、反射的に起き出して部屋を出ると、急いで玄関の戸の鍵をあけた。すると戸は外側から思いがけない力で引きあけられ、大きな紙袋とハンドバッグをかかえた、中国服姿の母親が立っていたのであつた。

母親は酒のおいを漂わせながら、不機嫌な声で純次に言った。

「いいのよ、いちいち起きて来なくなつて」

純次はそのとげのある声に微笑でこたえた。

「お茶をいれてあげるね。それとも紅茶がいい……」

母親は玄関の鍵をしめ、ハイヒールを乱暴に脱ぎ蹴つて家へあがつた。

「余計なことしないでいいって言つたでしょう」

「やらせてよ。お母さん、働いて帰つて来たんだしき。何だか眠れなかつたし、帰つて来たからお茶をいれてあげようと思つて……」

「うるさいわね」

母親は叱つた。

「早く寝なさい。あした学校があるんでしょ」

じゃれついて行つた小犬がいきなり蹴とばされたようなものだった。純次はわけの判らない怒りを抑えながら、すぐごと自分たちの部屋へ引き返したものだつた。

そのあと、母親は随分長いあいだ物音をたてずにいた。母親の理不尽な仕打への腹立ちもすぐに消え、純次は心配になつてそつとのぞきに行つた。

母親は畳の上に体をよじるようにして倒れていた。いや、倒れているのではなく、泣き伏していただけであつた。

螢光灯のしらばとした光の中で、母親の着た中国服の深いスリットから、白い腿あたりが見えていた。

泣いているということは、母親の肩や脇腹あたりで泣いて判つた。

なぜ母親がそんなに長いあいだ声を忍ばせて泣き続けているのか、純次にははっきりとは判らなかつた。

しかし、自分が母親を出迎え、お茶のサービスをしようかなどと言ったことが原因であることはたしかなようだった。

それ以来、純次は二度と夜中に帰って来る母親に優しい出迎えかたをすることはなかった。

また、玄關のある一戸建ての家に住んだのも、それが最後であった。

この代々木上原の本造アパートへ入る四、五年前は、母子三人で原宿のマンションに住んでいた。メゾネット・タイプのマンションで、入口は三階にあり、内部に階段があって四階に当たる部分には二つの洋間とバス、トイレ、洗濯室などがあった。上の二部屋に純次と妹の洋子が住み、階下は母親の領域であった。

その頃はよく夜中に客があった。見知らぬ男たちが居間のソファでいつまでも洋酒を飲んで喋っていることもあったし、やって来ていきなりカードをはじめすることもあった。

そんなとき、洋子も純次も自分の存在を消し去るように、息をひそめ、物音をたてずに体を堅くして朝を迎えたものであった。

3

大学へ入って一年後に、純次はこの本造のアパートへ移った。

「そうね、同じ子供がいるというのでも、娘が一人だけと言うほうがサマになるわね」

その相談を持ちかけたとき、母親は笑いながらそう答えた。純次はすでにそんな母親の赤く塗った

爪を見るのをおぞましく思うようになっていた。

洋子は泣いてとめた。

「嫌よ、お兄ちゃんがどこかへ行っちゃうなんて」

洋子は高校一年だった。

「これ以上うちがバラバラになるなんて嫌よ。あたし絶対に嫌……」

洋子はそう言つて泣きじゃくつたが、結局引越しの荷造りを手伝い、その荷物の中へ、台所用品や食器類を、まるで母親から盗むようにしてこっそり忍び込ませてくれたものであった。

そのあと一年程、洋子はひんばんに代々木上原へやつて来て、部屋を片付け、掃除をしてくれていた。「お兄ちゃんが留守だと不便だから」

と言つて、アパートの鍵のコピーを作らせ、いつも大事そうに持ち歩いていたものだったが、それもいつとはなしに間遠になり、近頃ではお互いに電話で声を聞くことも珍しくなつてしまつた。

外にとまつたタクシーと女の声から、いつの間にかそんなことを考えていた純次は、ハイライトがフィルターの近くまで燃えてしまつているのに気付くとわれに返り、それを白い灰皿で揉み消してまたスタンドの鎖を引いた。

灯りが明るくなり、純次は立ちあがつて窓際の机へ歩み寄つた。

机の上の茶封筒を取つて畳の上へ坐り込み、中身を引き出した。

大学の卒業見込証明書と成績証明書。写真に住民票に健康診断書、そして履歴書。履歴書は町の文具店で売っているごく普通の書式のもので、そこにも小さな顔写真が貼つてある。

履歴書の上の余白部分に、ボールペンで四桁の数字が走り書きしてあり、純次にはその数字が何を意味したのか判らなかつた。ひよつとすると整理番号かも知れないが、案外求人側の採否をきめる暗

号のようなものかも知れなかった。

純次はその四つの数字を合計して見た。4・7・3・6……答は20で末尾はゼロとなる。

0点……。

純次は舌打ちした。それが入社試験の結果を示すものかどうかは別としても、入社を断われ、書類を返送されてしまったことはたしかなことなのである。

同じ会社のテストを受けた友人の一人は採用されたという。成績は純次のほうがかなり上だったし、その友人は上目づかいでやや唇を歪めて喋る癖があって、他人に対する第一印象でも明らかに純次のほうが優位にあった。

純次は部屋の入口のそばにある小型の冷蔵庫のほうを見た。何か冷たい物でも飲むうと思ったのだが、すぐ首を左右に軽く振って視線を手もとの書類に戻した。そんなことで気を紛らすには、事態は重すぎるのである。

純次が書類だけではふるわれず、採用決定の近くまで行ったことはたしかであった。

身もと調査が行なわれたのだ。そういうことをするのが興信所か探偵社か純次はよく知らないが、とにかく家庭の状態を調べられ、最後の線で脱落してしまったのである。

純次は書類を叮嚀に重ねて、もとの茶封筒に納めた。どこかへ就職しなければ、という感じから、どこかで仕事を探さねばならないという感じに、彼の置かれた立場は変化して来ているのだった。

4

純次の父親は志島宗一郎と言い、死んではいない。母親のたか子は世間体をつくろって死別したよ

うに言っているが、今でもどこかに元気でいるらしい。純次が中学へあがった年に忽然と姿を消してしまったのだ。

しかし、たか子は宗一郎が失踪したあとも、結婚前の姓に戻ろうとはせず、志島姓を名乗り続けている。子供たちの姓を変えたくないというほかに、宗一郎名義の土地と家が残されていて、志島姓のままでいたほうが何かと都合がよかったらしい。

が、今ではそんなことはどうでもよくなっている。たか子は二人の子供を育てる為に、銀座のクラブへ働きに出るようになり、急速にそうした世界の水に馴染^{なじ}んで行ったのだ。

純次はクラブのホステスになり切って行きたか子を、はじめのうち嫌ったり憐れんだりしたものである。高校時代は悩みもした。だが、たか子が夜の世界で予想外の才能を発揮しはじめ、宗一郎の残した土地や家金をかえて自分の店を持つようになると、純次の母親に対する憐れみがまず消えた。経済的にも豊かになり、精神的にも張りが出ていきいきとしはじめた母親を見て、結局彼女は自分の不幸を乗り越えたのだと思わざるを得なくなったのだ。

しかし、それは同時に純次が母親から遠のく理由にもなった。夜の世界に生きる女となったたか子は、当然のように次々と男を変えていたようだが、自分のクラブを持ってからは野淵貞一という男性を相談相手とも保護者ともして、なかば公然と付合うようになったのである。

妹の洋子を母親のもとに残して純次が代々木上原のアパートに移ったのは、そんないきさつがあったからである。

専門の調査マンの手にかかれれば、そんな純次の背景は簡単に調べあげられるだろう。そうしたデータが出て来れば、会社側が採用候補者のリストからまず志島純次の名を削ることは当然ではないか……。